

令和八年八月度 御報恩御講拝読御書

なかおきにゆうどうごしやうそく
中興入道御消息

弘安二年十一月三十日

五十八歳

過去かこの父母ふぼも彼かのそと卒塔婆ばの功德くどくによりて、天てんの日月にちがつの如ごとく浄土じやうど

を照てらし、孝養かうやうの人ひと並びに妻子さいしは現世げんぜには寿いのちを百二十年ひやくにじゆうねん持ちて、

後生ごしやうには父母ふぼとともに靈山浄土りやうぜんじやうどにまいり給たまはん事こと、水みずすめば月つき

うつり、つゞみ鼓をうてばひゞき響のあるがごとしとを映ぼしめし候そうらへ

等云云。
此これより後々のちのちの御そとおん卒塔婆ばにも法華經ほけきやうの題目だいもくをあら顕はし給たまへ。

令和八年八月度 御報恩御講 『中興入道御消息』 (御書一四三四八行目～一一行目)

【通釈】

過去に亡くなった父母も、この塔婆の功德によつて、天の日月のように浄土を照らし、孝養を行う人や妻子は、現世では寿命を百二十年まで延ばし、来世には父母とともに靈山浄土へ参られることは、水が澄めば月が映り、鼓を打てばその響きが返ってくるように確かなことであると思ひなさい。ゆえに、これから後々に建立する塔婆にも、法華經の題目を書き願ひなさい。

【主な語句の解説】

そとば(卒塔婆)：梵語「ストウパー」(仏塔)の音写。率塔婆・卒都婆などとも書く。今日では、故人の追善供養のために題目、戒名、俗名などを書き記して建てる木製の塔婆を指す。

浄土：清浄な国土、仏の住む安穩で穢れのない世界のこと。

寿を百二十年持ち：「百二十年」とは、長寿の果報を象徴する数。

靈山浄土：靈山とは、釈尊が法華經を説いた靈鷲山のこと。転じて、仏が常住して法を説く清浄な場所の意。常寂光土。

【背景と大意】

本抄は、弘安二(一二七九)年十一月三十日、日蓮大聖人五十八歳の御時、身延から佐渡在任の中興入道夫妻に宛てられた御消息です。中興入道の父・次郎入道は、大聖人が佐渡に配流された当時、島の古老として人々から尊敬されていた人物でした。次郎入道をはじめとする一族が大聖人に帰依し、大聖人が身延へ入山されてからも御供養をお送りするなど、外護の真心を尽くしています。

本抄冒頭で、夫妻から送られた鷲目一貫文の御供養を御宝前に供えた旨を記し、夫妻の真心を讃えられます。続いて、我が国には欽明天皇の代に仏教が伝来し、聖徳太子によつて興隆したものの、大聖人御在世当時の人々は皆、念仏信仰の勧めに従っていたことを挙げられ、大聖人がその誤りを糾弾し南無妙法蓮華經を弘めたため、多くの迫害を受け、竜口法難・佐渡配流へと至った経緯を述べられます。さらに、蒙古の牒状が到来し大聖人の予言が的中したことで、諸宗の僧侶等が結託し大聖人の殺害を企てたことを記され、法華經の行者を憎み迫害する者は、諸仏・諸天によつて厳しく処罰されるであろうと述べられています。最後に、夫妻が父の信心を継いで供養を尽くすとともに、亡き娘の十三回忌にあたり題目を認めた塔婆を建立したことを褒め称え、その功德は無量であり、以後の塔婆建立を奨励され、本抄を結ばれています。